

十住毘婆沙論をめぐる諸問題

武 邑 尚 邦

一

竜樹の著作として伝承されている論書は数多くある。しかし、現在、諸学者の間で一応、一致して竜樹のものと考えられているものは『中論』『六十頌如理論』『廻靜論』『宝行王正論』『勸誡王頌』『大乘破有論』『菩提資糧論頌』『大乘二十頌論』『大智度論』『十住毘婆沙論』などの漢訳十部、およびサンスクリット、チベット訳などで伝承される『四讃歌』『広破経論』『空七十論』などで、十数部を数えることができる。

ところが、近年、これらの論書に対する研究は、これらの論書の中に真偽未決定の書があることを明らかにしつつある。すなわち、『大乘二十頌論』『大智度論』『十住毘婆沙論』などである。これらの中『十住毘婆沙論』の著者に関する研究として、これを『大智度論』と比較して、その学説の相異を指摘しながら、この両論の著者問題に關説しようとされた論文は、昭和三十三年（一九五七）の『印仏研究』五ノ二に発表された「十住毘婆沙論の著者について」という平川彰教授の

論文である。こゝで比較研究されている『大智度論』について、その著者が誰であるかは、この論文では明らかにされていない。たゞ、論文の末尾に追記として『十住毘婆沙論』を竜樹の著作とする故塚本善隆教授の意見が寄せられたことが付記してある。

ところで『大智度論』については昭和十九年（一九四四）以降ベルギーのエチエンヌ・ラモット（Etienne Lamotte）教授の貴重な研究が次々と発表されている。その現在までの既刊四冊に発表された『大智度論』卷三一までの研究の成果によれば、『大智度論』の著者は竜樹ではなく、三世紀末から四世紀にかけてカシユミール、ガンダーラ地方に活躍した説一切有部の正統派の論師であるというのである。わが国の学者の中では、故塚本善隆教授は、これを羅什の編纂したものであるという、于潟教授は、本論は根本的には竜樹の著作としながら、羅什の加筆の相当混入したものと主張されている。

このように『大智度論』の著者が誰であるかは、十分明ら

かになつたとはいえないが、いわゆる『中論』などを著作した竜樹の著作であるとする従来の考えには否定的である学者が多い。

ところが『十住毘婆沙論』については、直接その著者を問題として、その真偽を確定しようとする論文はみあたらない。この論を無条件に竜樹作とされる故塚本教授のような意見もあるが、必ずしも誰もが明確な立場をもっているとはいえない。たとえば、前の平川論文の場合にしても、著者問題を正面から取り上げ、従来の伝承の真偽を明らかにするという態度でなく、『大智度論』と比較して、両論の内容をなしている立場について相違があるとして、十二部経と九分教の問題、五法藏説の取り扱いかい¹の差異、五戒、八戒、存家戒、出家戒などに関する十善戒などに関する考え方の相違を指摘して、両論の著者が別人でなければならぬと主張されているのである。したがって、どちらが竜樹のものであるかという議論はない。ところで、この平川論文では、議論は、現在ある『十住毘婆沙論』十七巻をその現在形の上で問題にするので、その訳出事情については面倒な問題があるので触れないと慎重な態度をとっている²。

二

さて『十住毘婆沙論』や『大智度論』について、その著作の模様や著者を明らかにするという試みは、それぞれの論の

思想内容を明らかにするためであり、また、その論の教団史的位³置、思想史上の位³置などを確認するためであることはいうまでもない。しかし、こゝで、いまこれらの竜樹作と伝えられてきた論書について、その著者や著作の模様を明らかにしようとするのには、もう一つ別の理由があるのである。それは次のような問題提起である。

元来、竜樹の著作の研究は、彼こそ大乘仏教の確立者であるから、それによつて大乘興起時代の仏教の実態を明らかにし、大乘仏教の根本思想が何であるかを明らかにするという目的をもつていた。ところが、もし従来は竜樹の著作として取り扱われていたものが、実はそうではなく、著者が別にあつて、しかも、それを竜樹に仮託したことが明らかになれば、初期大乘教団の実態について、このことが新しい一つの視点を与えることになると思われるのである。すなわち、次のような視点を問題として提起することになるであろう。

大乘仏教の主唱者たちが、自らの集団を僧伽（saṅgha）とよぶよりは、ボディサットバ・ガナ（bodhisattva・gana）とよんでいたであろうことは、既に学者の指摘するところである⁴。それは、まさしく菩提を求め、覚りを開こうとの意欲にもえる人々の集団であり、それは実践的な信者の集団であつたと思われる。このことは舍利塔崇拜を中心とする大乘の諸經典が示すところである。したがって、この集団には、いわ

ゆる阿毘達磨的な經典研究という姿勢はなかつたし、それは方広運動として經典を中心とする実践集団であつたと思われる。ところが、このようにして拮まつてゆく方広運動に対して、大きな関心をもつたのは、実は部派の人々であつた。これら部派の人々は方広運動のよりどころとなつてゐる大乘經典に深い関心をもたずにはおれなかつた。このようにして、大乘の經典に自らの學問的方法である阿毘達磨の研究を加えていつたと考えられる。インドにおける大乘仏教の中で中觀派に対する瑜伽行派は瑜伽行といふながら、それは大乘阿毘達磨であつたことは、これを示してゐるであらう。

もちろん、このような考えを提起するためには、さらに適確な資料的研究が必要であるが、たまたま、この推定を裏付けるものが、ラモット教授の『大智度論』研究の成果であるように思われるのである。いわゆる『大智度論』が『大品般若經』に対する有部の阿毘達磨的研究であるとするならば、それは前に示した推定を裏付けることになるであらうし、それが竜樹の著作として仮託されたということは初期大乘仏教の姿を知る一つの手懸りを与えるものであらう。

以上のような視点に立つ時、『十住毘婆沙論』に關しての種々の問題の解決の鍵が、このようなところにあるように思われるのである。いま、次に諸學者の研究の成果をふまへながら、『十住毘婆沙論』の訳出事情に検討を加え、この論を

めぐるいろいろの問題の所在を明らかにしたい。

さて、本論の訳出事情については、藤堂恭俊教授に「十住毘婆沙論漢訳攷」なる研究があるが、これらの研究をふまへつゝ、その事情を概略明らかにしたのが拙著『十住毘婆沙論研究』の序論である。そこで詳しく述べたように現存の經錄を調査するとき、そこにはいろいろの記録が残されてゐる。まず、最も古いといわれる『出三藏記集』では羅什訳出本の中に「十住論 十卷」とあつて「十住毘婆沙論」の名はない。たゞ、卷四の「新集統撰失訳雜經錄第一」に「初發意菩薩行易行法一卷 出十住論易行品」の記録がある。これによれば、この「十住論 十卷」が現存の『十住毘婆沙論』であつたと思われる。次に『法經錄』では第五卷「衆論一訳本」に「十住毘婆沙經論 十四卷 竜樹菩薩撰、後秦世羅什訳」とあり、こゝでは「十住論」という記録はない。しかし、この經錄には「易行品諸仏名經 一卷―右一經出十住毘婆沙論」というのと「十住毘婆沙抄 一卷」という記録がある。次に『彥琮錄』には『法經錄』と同じ記録があり、『靜泰錄』も同じである。

ところが、『歷代三寶記』になると卷四に「十住毘婆沙經 一卷 失訳」。卷六に「初發意菩薩行易行法經 一卷 出十住論」。卷八に「十住毘婆沙 一十二卷 竜樹菩薩造」と「十住論 一十卷 竜樹菩薩造 弘始年訳未訖第一卷末、似六度

集經、見二秦録」とあり。卷十三の「大乘阿毘曇有訳録 第五」に「十住毘婆沙經論 十二卷」とある。これらを見れば『歴代三宝紀』が、従来伝承された経録の記録を批判することなく集録したように思われるのであり、当時は十二卷の『十住毘婆沙論』が伝承されていたことを知るのである。

この『歴代三宝紀』をうけながら、これを整理したと思われるのが『大唐内典録』である、こゝでは『十住毘婆沙論』十四巻が記されている。その後『十住毘婆沙論』に十五巻本のあつた記録があるが『開元釈教録』には、これらを整理、記録としては巻一に「十住毘婆沙經 抄十住論」。巻四の羅什訳出項下に「十住毘婆沙論 十四巻 或無論字、竜樹菩薩造、或十二巻或十五巻、見長房録」。巻十二の「有訳有本録」に「十住毘婆沙論 十四巻 竜樹菩薩造、或十二或十五 姚秦三藏鳩摩羅什訳單本」。巻十六に「大乘別生」として「十住毘婆沙經 一卷 僧祐録云、抄十住論新編上。易行品諸仏名經 一卷 法経録云、十住毘婆沙、或即与前易行法同。菩薩悔過法經 一卷 出竜樹十住論、或無經字新編上。菩薩五法行經 一卷 祐録云、抄陳録云十住論新編上」。巻十九の「大乘見入藏録」には「十住毘婆沙論 十四巻 或無論字、或十二巻、或十五巻二百七十六紙」と巻四の記録を重出する。以上の記録の検討から、経録の上ではいろいろ記録されているが、結局は巻数はいろいろであるが、現存の十七巻本の

『十住毘婆沙論』が十巻、十二巻、十四巻、十五巻などと分巻を異にして伝承されたといつてよいであらう。たゞ、この中で古来から「易行品」と「阿惟越致品」の叙述が注目され、それが別行経のような形で伝承されていたことは注意すべき事柄である。

このことは、中国において『十地経』は、はやく西晋の永康七年（二九七）に竺法護に『漸備一切智徳経』の名で訳出され、それ以後、羅什訳『十住経』、仏陀跋陀羅訳『六十華嚴』中の「十地品」、菩提流支訳『十地経論』の本文、実叉難陀訳『八十華嚴』の「十地品」、戒法訳『菩薩十地経』などと六回の訳出があり、この間、本経に対する関心も弘充、慧亮、曇斌などの講経、道安の弟子の僧衛の注釈、羅什の弟子道融の『十地義疏』の撰述などと相当深いものがありながら、『十住毘婆沙論』に対しては、北魏の靈辨（四七六―五一二）の『華嚴経論』に注意されているとはいつても、殆んど関心がもたれることなく、たゞ曇鸞など浄土教系の人々が「阿惟越致教相品」「易行品」などに関心をもつたことと関係があるように思われる。

三

以上の経録の検討からは、本論が分巻の相違はあるが、おそらく一本のみの伝承であることはしられるが、本論の著者訳者の点については別に疑を挿む余地はありそうにない。

ところが、具体的な訳出事情を考え、本論の内容や形式について検討する時、そこにはいろいろの問題があることに気付くがある。以下、これらの点について吟味しよう。

第一は引用諸経論についての問題である。本論の引用経論に關しては一九七六年十月の「仏教学」第二号に「十住毘婆沙論への引用と物語―大智度論との比較」という題で三枝充惠教授の詳しい指摘がある。それによれば一九九にわたる引用があるとしている。自分は「十住毘婆沙論研究」の中で、経論の名の出されるもののみを各品にわたつて一〇二ヶ所を指摘した。ところで、これらの引用を確実に現存経論に確認することは殆んど不可能である。しかも、奇妙なことは本論と同じ羅什訳の經においてさえ同じ經文を見出せないのである。たとえば「地相品」に引用される『淨毘尼經』は、明らかに羅什訳「清淨毘尼方広經」である。ところが引用文を検討すると、引用文の「迦葉白仏言希有。世尊善說菩薩以是薩婆若多心能勝一切声聞辟支仏。」が經では「時大迦葉白世尊言。未曾有也。如來善說諸菩薩等發於一切智寶之心出過一切声聞緣覺。」とある。しかし、これはまだよくわかる分で「大乘品」で「大乘法中淨毘尼經」の文として出される「仏告迦葉、譬如生酥滿四大海、菩薩有為善根寶糧亦如是、是福德廻向無為智。則大利益一切衆生。是故菩薩雖處有為、能勝一切世間。」は「清淨毘尼方広經」の「迦葉、如滿大海中之酥、

菩薩有為善根功德、亦復如是、用以廻向無為智故。」に相当するが、同一人がどうしてこのように全く別の訳をしたか不思議である。このような事例は他の引用についても、適合するのである。引用の具体的な文章でなく、たゞ経論の名前についてゐても、本論の上において種々の訳語がなされている。たとえば、所釈の『十住經』についてさえ、『十住毘婆沙論』では「序品」には「十地經」、「入初地品」では「十住經」と別の名で訳出し、十地と十住と別に意識しないで同じに用いているのである。このような訳語の混用は、『論』の要略偈では第二地を離垢地といふ、經では羅什訳だけが淨地と訳しているなど多くみられる。

さらに、引用経論の名についてみると、たとえば、『無尽意菩薩經』に關しては、同經と思われるが「無尽意菩薩和合品」「宝頂經中無尽意菩薩第三十品檀波羅蜜義中說」「無尽意菩薩會品中檀波羅蜜中說」「無尽意菩薩經檀波羅蜜品」などと訳出され、「宝頂經中和合品」「無尽意菩薩尸羅品」ともいわれるなど全く規準がない。しかも、これらは現存では『宝積經』の「無尽意菩薩品」とは相応せず、大体『大方等大集經』第三七卷「無尽意菩薩品」第十二ノ一の中に相応が見出せるのである。このことは『宝積經』と『大集經』という叢書の經典の成立問題にからんでいるのかもしれないが、訳者自身が訳出にあつて考慮したと思われない。

十住毘婆沙論をめぐる諸問題（武 邑）

また、現存のものではないが、同一經と思われるものに「決定王經」「決定王大乘經」「大乘決定王經」と別々の訳語を与えているし、ことに現存の竜樹菩薩造の『菩提資糧論』の頌に合致する文章が「助菩提」「助道法」「助道經」「助道」などとよばれるものの文章として引証に用いられている。このことは『十住毘婆沙論』を竜樹造とした場合、自らの著作をもつて、自らの主張の裏付けとすることが常識では考えられないことであり、問題のあるところであろう。

このように点検してみると、三惡道を地獄畜生餓鬼といったり、地獄餓鬼畜生といったり、また三解脱門を空無相無願といったり、空無相無作といったりする訳語の差異を含めて、本論における訳語の混乱は、同一人の訳出とは思えないのである。ここに、羅什の訳出については国王を發起者として訳場を設け全国から集められた学者、いわゆる四方義学僧を協力者として行われた国家事業であつたことを思えば、『十住毘婆沙論』の訳出についての上の実状は全く奇妙なことである。

この一見奇妙と思われる現象は何が原因であるのだろうか。このことに関して本論訳出の模様を検討してみよう。

四

賢首大師法藏は『華嚴經伝記』の中で次のようにいう。

「十住毘婆沙論 一十六

竜樹の所造であり、十地品の義を解釈するものである。後秦の耶舎三藏が其の文を口誦し、羅什法師と共に訳出した。十地品を解釈するものではあるが、第二地をおわつた時、その余の文について耶舎が口誦をやめたので、遂に解釈を欠くことになつたと伝えられているが、これは大不思議論の一部分である」⁸⁾

この記録の依りどころは羅什訳の『竜樹菩薩論』や梁『高僧伝』⁹⁾中の「鳩摩羅什」「仏陀耶舎」の項下の記録であると思われる。もつとも「大不思議論」の存在については『竜樹菩薩論』中に「優婆提舎十万頌」をつくつたという記録によると考えられているが、この優婆提舎がいまの毘婆沙であるのかどうかは確認しようがないが、それはしばらくおくとして、まず、耶舎口誦、羅什共訳という点について検討しよう。梁『高僧伝』『仏陀耶舎』の項下に

「後秦の王姚興によつて請致せられた羅什は、王より經典の訳出を要請せられたところ、彼は法教を弘宣するためには、その文義に熟達していなければならぬ。ところが、自分はまだ十分に經文に熟達していないので、文章の誦出はできるけれども、それを中国に訳出するということは到底不可能である。そこで、いま姑藏に在る仏陀耶舎を迎えてほしい。彼は教文に深く達し、これをよく理解しているので王に願つた。そこで王は書を送つて耶舎の來駕を請うた。」

といふ、次で

「時に羅什は十住經の訳出の要請をうけ、これを訳出しようとしたが一月余りたつても、經文にたいする疑難が解けなかつた。そこで、かねて要請していた耶舎が到達したので、共に相談をしながら訳語を決定して訳出したところ、道俗三千余人みなその正確なことをしつて、二人をほめたゝえた」¹⁾

といつてゐる。

さて、以上の記録から『十住經』訳出について、次のような事情がしられる。すなわち、第一に羅什は『十住經』について、その經文に熟達していなかつたので訳出に自信がなかつたということである。もともと、羅什にとつて最も関心の深かつたのは、僧叡の『大品經序』に示されるように『大品般若經』の正確な訳出であり、竜樹提婆に説かれた中觀の教學の宣布であつた。このことは、この經の訳出に際して後秦王自ら旧本を持つて参加したといわれ、その訳文を正確にするため『大智度論』をも翻訳したなどと伝えられることによつてしることが出来る。この点で、羅什にとつて『十住經』は十分理解されていない經であつたのであろう。

第二には、この点から仏陀耶舎の協力を要請したというのであるから、羅什共訳といつても、それは事実、仏陀耶舎を中心としての訳出であつたと思われる。

次に、この『十住經』に対する註訳書である『十住毘婆沙

論』の訳出についてであるが、前の記録から、本論はテキストなしの耶舎口誦であることが、まず注意される。次に、第二地まで、第三地以後は口誦しなかつたから解釈を欠くという点が注意される。

さて、テキストのない『十住毘婆沙論』がどうして訳出されねばならなかつたのか、しかもごく一部で終つたのはなぜなのか。この点については直接これを解明する資料はない。しかし、記録によれば仏陀耶舎が支法領と共に中国長安にやつてきたのが弘始十年(四〇八)であり、耶舎は羅什入寂の弘始十五年頃に罽賓へ帰国しているので、精々この四年間位に「四分律」「長阿含」を訳出しているのでありそれを十二年以後に訳出したといわれるから、『十住經』『十住毘婆沙論』は弘始十年から十二年迄の間の訳出と考えられ、おそらく同時訳出と考へべきであらう。とすれば、『大品般若經』訳出の例にならつて、『十住經』訳出のための用意に訳されたものと考えられることも無理のない推測であらう。このように經の正確な訳出の為に論を訳出するということは、正しく訳経僧の勤めが經を訳出することにあつたことを示している。

ところで、本論が耶舎の口誦にかゝる点は、とくに注意をひく点である。というのは口誦によるということは、耶舎自身にとつて本論は最も親しいものであつたと思われるからである。成程、經典は本来口誦されたものであつたことはい

までもない。その点、本論の口誦も別にこと新しいことであつたとはいえないかもしれないが、口誦であつたことをことさら述べていることは、耶舎が平素から常に暗誦していたものであることを意味する。このことは本論が耶舎の所属する部派に伝承されていたものであることを示している。いま彼の所属の部派は、いうまでもなく記録されているように法蔵部である。とすれば、この論は少くとも法蔵部の中に伝承されたものであることは明らかである。その点、羅什の所属部派は明瞭ではないが、有部系に出家したように思われるので、これを全くしらなかつたと考えられる。

いま、このような点から推測するに、『十住毘婆沙論』は、著者が竜樹であるかどうかは、しばらくおくとしても、それが竜樹造として法蔵部の中に伝承されていたことは明らかである。さらに、それが口誦によつてまで伝承されていたことは、それが法蔵部の考えと根本的に相反しないという考えのもとにあつたことは推測できるであらう。このような点は「入寺品」における在家菩薩の出家菩薩への尊敬と、それへの指向ということに示されている。もちろん、この場合の出家者は、いわゆる声聞二乗のいう比丘比丘尼、沙弥沙弥尼などではなく、十善道といういわば在家戒を学ぶ守る人々である。また、そこには塔供養による在家から出家への指向が示されている。このことは、根本的に僧中有仏に立ちながら解

脱は一つ聖道は各異とする法蔵部の考えを示しているし、いわゆる『四分律』にいう「塔供養による成仏」という立場と共通しているのである。

さらに、本論は「入寺品」の終りに初地は在家菩薩の願行を説き、第二地では出家菩薩の修行を説くといつて、しかも、一般には在家戒である十善道を説いているのであるが、このことは『十住毘婆沙論』のいう出家とは単に一般にいう出家ではなく、正しくは在家菩薩であり、初地は五戒、第二地は十善戒と区別していることを知るであらう。しかし、十善道が在家戒であるならば、『十地経』自身は第二地は在家の立場にあるが、『論』はこの第二地を出家の所行を説くといふのであるから。この両者は必ずしも一致しているとはいえない。このような事情が、或は本論の訳出がありながら、永く余り重要視されなかつた理由であるかもしれない。ところが、以上のことが、本論を第二地迄の訳出した理由であるのかもしれない。

五

もちろん、法蔵のいつている第三地以後の未翻については、耶舎不誦がその原因であることはいうまでもない。しかし、一体なぜ不誦であつたのだろうか。それには、次のような事情が考えられる。

まず、第一は『十地経』の訳出を確実にするためであるか

ら、全部を訳出する必要はなかったと考えられること。いま、僧叡の『大品経序』によれば「弘始六年、四月二十三日に訳出をおわる。文はほど定まつたが、釈論をもつと検討してみると、なお多く意をつくさないものがあつた。そこで釈論を訳出し、それによつて文をたゞした。いま、釈論を訳出しおわつた。それにしたがつて文もようやく定まつた」という。これと同じように『十住毘婆沙論』も『十住経』の訳出のためになされたとみるのである。この場合、訳出の仕方また両者に共通であることも注意される。

次に第二には、僧叡が『大智度論』に「胡文の委曲は、みな初品の如し。法師、秦人の簡を好むを以つての故に、裁してこれを略するなり。もし備さに其文を訳すれば、まさに千有余卷に近かるべし」といつたように、いまも、また、中国人が一般に簡潔な文章を好むことに相応して、初地に詳しく、後に簡略な訳出をしたと考えるのである。初に詳しくするのは、インドの文献は、元来、初めに重点がおかれていから、この部分のみ詳しくすれば、一論の大意は自ら明瞭になるからである。

次に、第三には、元来、本論は『十地経』の解説書ではなく、毘婆沙といわれるように「種々の説をかゝげ、それらを批判しながら、やがて、勝れた説を確立してゆく」という体裁をもつものである。したがつて、『十地経』全体に随文解

釈的な注を施す必要はなく、いわゆる十地に示される菩薩道を明らかにすればよいわけである。この点から「入寺品」に示されるように初地について在家菩薩の姿を示し、第二地について出家菩薩の姿を示したので、第三地以後の訳出は不必要であるとするのである。

以上の三様の考え方は、いずれも可能と思われるが、とくに第三の考え方が、最も本論の訳出が第二地で終つている事情を正しく伝えるものと思われる。というのは本論の中、『十地経』の要略偈を中心として論が進められているのは、十地の名を指定する序品を別にして、「入初地品」「地相品」「浄地品」「釈願品」「分別布施品」「四法品」「念仏品」「譬喩品」「略行品」の初地に関する部分と「分別二地業道品」「分別声聞辟支仏品」「大乘品」「護戒品」の第二地に関する部分とである。いま、これらに要約される経文それ自身は、經典が經典として成立する根本となる「序分」「三昧分」「加分」「起分」「本分」「請分」などについては全く触れることなく、初地そのものを説く「説分」と「校量勝分」にのみ関係し、第二地については「清淨戒」と「果利益」に関するもののみを取り扱かつているのである。ことに注意すべきは初地の中で「釈願品」において十大願を説明し、その願の解釈の下で「分別功德品」までに難易二通を示すことである。すなわち諸願の根本は発心にありと「発菩提心品」を説き、それにつ

十住毘婆沙論をめぐる諸問題（武 邑）

いて必定して成就する発心と不定なる発心を示し、しかもその必定不退の菩薩を「阿惟越致相品」に示し、菩薩の死といわれる墮二乗の過失のない必定の成仏道こそ易行道であると示し、それをたとえ地獄におちても畢竟成仏の道といふ、その墮地獄を克服する道を「除業品」「分別功德品」において説き、それこそ懺悔、勧請、随喜、廻向であると説く七品の叙述である。かくて必定の菩薩道を示し、行勝として布施行を説き、果利益を説くのである。

以上「十住毘婆沙論」について、いくつかの問題を指摘してきたが、本論が法蔵部の耶舎の口誦であることは、著者問題について一つの視点を与えるものであろうし、さらに、この論が『十地経』によりながら在家出家の菩薩道を説いている点、明らかに『十地経』の註釈というより、経を素材とする大乘菩薩道を示す論と考ええられるのである。これが、やがて浄土教系の中に大きな位置をしめることになつたと思われるのである。

1 爪生津隆真『大乘仏典』14の解説。

2 エチエンス・ラモット
加藤 純 章 訳 大智度論の引用文献とその価値（仏教学第五号）

五号）

3 千渴竜祥 大智度論の作者について（印仏研究七ノ一）

4 平川 彰 十住毘婆沙論の著者について（印仏研究五―一二）

5 平川 彰 『初期大乘教団の研究』第九章（七九七頁―）

6 仏教文化研究 三

拙著『十住毘婆沙論研究』六頁―十三頁。

7 拙著『十住毘婆沙論研究』六頁―十三頁。

8 大・五一・一五六^c。

9 大・五〇・一八四^c。

10 大・五〇・三三〇―三三五。

11 大・五〇・三三四^a―^b。

12 平川 彰 『初期大乘教団の研究』六三一頁。

13 大・五五・五三^b

14 大・五五・七五^b

15 拙著『十住毘婆沙論研究』一六頁―

16 前引書 付録「十地経と十住毘婆沙論の關係表」参照
（竜谷大学教授・文博）